紫愛歌【Ⅲ・水のうた】

Elegy：MIYUKI

藤井深幸の日記（※勝手に見るべからず！）

四月七日（金）

　この日は入学式だった。暖かくて、お昼寝にはもってこいの天気だった。私はいやいやながらも入学式に出席、幼馴染の牧野零（まきのれん）と、幼少期に見ていて最近また見るようになった夢の話をしていた。私は前世とかそんなものの夢だと言ったが、零は相手にしてくれなかった。今では私もさすがに馬鹿馬鹿しいと思っている。

　この日、私と零は、鷹見尚（たかみなお）という少年に出会った。一歳年下の可愛らしい少年だった。私よりも彼の方が断然女子力が高いと思う。しかし、何故か彼と目が合った時に、気持ちの悪い感覚がした。原因は不明。

四月二十三日（日）

　この日はただの休日だった。家で考え事をしていても家族に邪魔されそうだったので外に出た。

　近所の公園のベンチに座っていると、お姉ちゃんこと夏目佳子さんと会った。鷹見尚くんの話を聞いてもらった、茶化されたが、最後は真剣に考えてくれた。相変わらずいい人だった。

　お姉ちゃんと別れてかなり経ってから、東雲弥茄（しののめやな）という少年に出会った。育ちの良さそうな大人びた少年だったが、彼も私より一歳年下らしい。世界は残酷だと本気で思った。

　彼と目が合った時も変な感じがした。けれど、尚くんの時のような嫌な感じではなかった。これも原因は不明。

　ここまで書いて私はシャープペンシルを動かす手を止めた。やっぱり駄目だ、まとまらない。

　どうしてこんな事をしているのか言うと、クラスの友人が、悩みがあるならお風呂場で独り言として話してみるか、日記を書くといいよと言ってくれたからだ。そして、さすがにお風呂場で独り言なんて言っていたら、家族に変態扱いされかねないと思って日記を書くことにしたのだ。が、

「訳が分からないままだあ……」

　困ったことに、いや、半ば予想はついていたが、全く分からない。悩みは晴れてくれなさそうである。

「頭がーこんがらーがるよおー」

　適当に歌を作ってみる。意外と上手く出来た。零なんかは、私の歌を聞く度に耳を押さえているが何だろうか、そんなに私の歌声は綺麗なのだろうか。神々しいのだろうか。照れるわー。

　隣から兄のうるさいと言う声が聞こえた。うるさいのはそっちだ。現代に残った最後のアウストラロピテクスめ。部屋の壁をガンガン蹴りまくって何がしたいんだか。家を壊す気か。

「お兄ちゃんに構ってちゃ駄目だ」

　頬をぺちっと叩いて気合を入れなおす。もう一回纏めてみよう。

「そう言えば、夢を見始めたのも入学式のちょっと前辺りだったよね。何か関係があるのかな……いや、そんなまさかね」

　そんなまさかだ、本当に。そうなると、同時期に二人も関係のある人間と出会ったことになる。そんな偶然あってたまるか。可能性は天文学レベルだろう。

「いや、でも可能性はゼロじゃないわけだし……」

　そう、この時私はこの二進も三進もいかない状況からどうにかして抜け出したかったのだ。だから、こんな馬鹿らしいと言える考えもあり得ることにしてしまいたかったのだ。

「と言うか、さらっと出てきたけど、夢のことについても考えな

くちゃいけないんだよね。まったく分からないけど！」
謎は多い。また日記をつけてみるのもいいかもしれない。あれは、良い考えは思いつかないがすっきりしなくもない。
「もしかして、日記をつけるといいってそういうことなのかな」
今までやっていたことはズレていた……なんてこった。
「まあ、いいや。夢について分かっているのはっと。紙、紙」
机から適当な紙を取り出してまたシャープペンシルを持つ。
まず、書き出せるのは
「夢を最初に見たのは、えっと、たしか三歳か四歳のときだったと。まだおばあさまの家にいた時だったよね、五歳でこっちに移ってきたから。で、八歳ぐらいで見なくなった。また見だしたのは今年の三月から。それから今現在に至るまで見続けている、と」
考えるとしたら、やっぱり夢を見なくなったときになにがあったかと、夢をまた見だしたときに何があったかだろう。
「八歳のときかあ。なんかあったっけ？　いや、なかっ……あ、あったわ」
すっかり忘れていた。あの出会いを。
「確かどこかに日記があったはず……あった。『あるなつの日のであい』……何か恋愛小説的なあれだな。うん、恥ずかしい。呪いたい、自分のネーミングセンス」
小学校二年生でこんな題名をつけるとは、恐るべし、幼い頃の純粋な自分。
「えーと、あそこ何処だったっけ。あ、そうだった。そこだった。うわー、懐かしい。写真も貼ってある。お兄ちゃん可愛いー」
読み進めていくうちに段々あの頃が蘇ってきた。

「こら！、深幸！　うろうろしない！　こっち来なさい！」

「や！　みゆ、ここ気になるの！　ここちょーさするの！」
私が小学二年生のとき、家族旅行でとある町に来ていた。そこは、父親が幼い頃から夏に避暑地としてよく来ていた場所らしい。別荘があって、父親はその時そこで過ごしていたという。そしてこの時もそこに泊まることになっていたのだ。
幼い私はやんちゃで、親の言う事を聞かない子どもだった。この時は、たくさんの品物が並んだ骨董屋に入ろうとしていた。
両親は私に手を焼いていたけれど、元気な姿を見ると安心するようだった。その理由は私が見る悪夢だった。毎夜毎夜うなされて飛び起きる。一時期は眠るのも嫌がるほどだった。まあ、所詮は小さい子どもの抵抗だ。最後には寝てしまうのだが、それでも気持ちよく眠れないのだから親としては心配だったのだろう。
「深幸―、そろそろ喉乾かないか？　お茶、飲もうか」
父親が私を呼ぶ声がした。そう言われれば乾いている気がしてきて、私は家族の元に戻っていった。

「おにいちゃん、あそーぼー」
二歳年上の兄は意地悪でよく私を小突いたりするけれど、よく一緒に遊んでくれるので私は兄が大好きだった。
「おう、何して遊ぶ？」
兄は大きなカバンをゴソゴソとして、荷解きをしながら言った。
「おにいちゃん、その手にもってるのはなに？」
何がしたいと訊いておきながら、彼はその手に先ほど鞄から取り出したのは釣り竿だった。折りたたんで小さくして鞄に入れていたらしい。さらに彼は部屋の隅にあったバケツを持ってきた。完全に釣りに行く気まんまんだった。と言うか、それ以外の選択肢はなさそうだった。しかし、単純な私は、釣り道具を見て、すっかりその気になり、行こう、行こうと騒いだ。兄の手を引っ張

って、森へと向かった。
森は別荘の裏手にあって、さらさらと小川が流れていたりする。そこには魚もいて、釣りもできるのだ。なぜ、初めて来た兄が知っていたのかと言うと、どうやら父親に教えてもらったらしい。私と兄は近所の川とは全く違う綺麗な流れる水にはしゃいで、しばらくパシャパシャと水をかけあった。
釣りを始めて一時間程経ったときだろうか。上手く釣る兄に対して、一向に釣れない私はイライラし始めていた。
「もう、や！」
とうとうキレて、釣竿をほっぽり出して、森の奥へと駆け出した。後ろで兄の声が聞こえた気がしたが、無視した。
森は深くて暗かった。しかし、頭に血が上っていた私はそれに気付かなかった。兄が追い付けないようにとただ必死に走った。
どれくらい走っただろうか。何となく周りが暗いことに気付いて、私は足を止めた。見渡してみるとどこだか分からないところにいた。木々はどれも同じように見えるし寒い気もしてきた。上を見上げてみると、木の葉の隙間から見えた空は、真っ暗だった。
「どこ？　ここ」
私は急に不安に襲われてその場にしゃがみこんだ。涙が込み上げてきた。
「うえっ、おにいちゃん、どこお？」
ぐすぐすと声を上げる。兄の返事は聞こえてこず、自分が一体どの方向から来たのかも分からなくなり、やめておけばいいのに、フラフラと歩き始めた。
「おにーちゃん！　おにーちゃん！　おにーちゃん！」
大声で叫びながら歩く。頭にぽつっと水滴が落ちてきた。雨だった。それはみるみるうちに勢いを増して、私に刺すように降りかかってきた。服が水に濡れて重くなった。
どこかこれを凌げる所に避難しなくてはいけないと思って、走りだそうとしたところで、ぬかるみに足を取られて転んでしまった。泣くのを我慢して、傷があるかを確かめた。幸い擦りむいたところは無かった。それにまずホッとして、立ち上がり、泥でさらに重くなった体を引きずるようにして今度は転ばないように慎重に歩いた。
「家がある！」
目の前に家があった。どれくらい前に建てられたのか分からなかったが、屋根が藁ぶきで、木造なところを見るとかなり古いものだと推測できた。何はともあれ、雨が凌げる所があったのだ。入るしかないだろう。
「おじゃましまーす」
建付けの悪い扉をがたがたと開けた。中は雨漏りしているところもあったが、そんな事は気にもならなかった。
靴下ごと靴を脱いで部屋にあがった。中を見渡すと、箪笥や甕などがあって、人が住まなくなってかなり経っているだろうに、生活していた跡が感じられた。
「たんすの中に何かないかな」
失礼ではあったが、濡れた服を着ているのが一番辛かったのだ。
「あ、あった。うわあ、きれいなきものだあ」
箪笥の中には、一着の着物が置いてあった。藍色の地によく分からなかったが植物らしき柄の優美なもの。年代物であろうに、何故か虫食いなど一つもなく、綺麗なままだった。
それはかなり異常な事で、大きくなった私であれば恐ろしく思って帰っただろう。けれど私はその時、服が見つかったことで喜んでいて、しかも歩き続けで疲れていて、もう限界だった。だか

ら違和感を抑え込んでしまったのだ。
「かりますねー」
律儀なのか何なのか、いないことは分かっていたが一応断りを入れて元々着ていた服を脱ぎ、着物に袖を通す。大人が着ていたものらしく、すこし大きかったが、冷えた全身を包むには丁度よかった。帯は無いのかと再び箪笥を探ってみると、奥の方からクリーム色の帯が出てきた。こちらも綺麗なままだった。自分では巻けるはずもないので、枕にしてみるといい具合にフィットした。
「うー、疲れた……。寝よう。ちょっとだけ、ちょっとだけ」
くたくたになっていた私は、欲求に素直に従って、眠ることにした。眠気は待っていたとばかり襲ってきて、私はちょっとだけと呟きながら深い眠りの中に落ちて行った。

「おーい、おーい」
すぐ傍で声が聞こえて、目が覚めた。何時だろうと手探りで時計を探したがその手は固い木にぶつかるだけだった。
そこでやっと自分が家にいないことを思い出して、がばりと体を起こした。
「あ、起きたかい？」
隣から声が聞こえた。心臓がばくんと音を立てた。
深呼吸をして心臓を宥めつつ首をそちらに向けると、一人の男がいた。今時珍しい着物をきた男だった。背は百六十センチくらいだろうか、低い目だ。顔のしわから推測するに、四十代か五十代前半と言ったところだろう。しかし、それよりも目を引いたのは頭だった。時代劇で見たままのちょんまげだった。あまりにも『ぽい』格好に、つい笑ってしまった。
「何を笑っているんだい？　私の顔に何かついていたかな」
彼が口を開いた。そこで私はハッと固まった。そう言えば、この人は誰なのだろうか。変質者？　それにしては普通じゃないところが外見以外見当たらない。いや、会ったばかりなのだから内面など分からないし、見た目だけでも十分なのではないだろうか。
「あなた、だれですか……？」
「己から名乗るのが礼儀ってものじゃないかい？　まあ、いいか。まだ小さいんだし。私の名はみかみ、みかみなおたかだよ」
彼は人好きのする笑顔で名乗った。その笑顔に邪気が無いのに安心して、こちらも名乗らねばと口を開いた。
「みゆは……わたしは、深幸っていいます。八歳です」
その途端、彼の瞳が見開かれた。
『みゆき』と言うんだね？　確かにそうなんだね？」
「うん、そうだ……ですよ……!?　なんでないてるんですか!?」
彼の顔がこれでもかと言うほどに歪んでいた。目からはぼろぼろと涙が零れていた。私は慌てて、彼の顔色を確かめた。
「どうかしたんですか？　お腹いたい？　ケガしてるんですか？」
私がそう言いながら彼の顔に手を伸ばすと、彼はそれを避けるように身を引いた。
「大丈夫だよ。ちょっと、知り合いと同じ名前だっただけだから」
「そうなんだ……ですね」
「無理に丁寧な言葉を使わなくても大丈夫だよ」
使い慣れていない敬語に気付いたのだろう、彼は微笑みながら言った。
「ありがとう。じゃあ、えっと、なおたかはいったい何者なの？　どうしてここにいるの？」
「私は、とある武家の出なんだ。まあ、地位はかなり低いけれどね。将軍様にお目通りすることなんて夢のまた夢というくらいに」
「ねえ、『ぶけので』って何？　あと『おめどおり』って？」
純粋に分からない事を訊いただけのつもりだったのだが、彼は

虚をつかれたように黙り込んだ。私は怒らせてしまったのかと思い、慌てて言い訳した。
「あ、えと、そのちがうの。私、あのまだ社会はならってなくて」
「うん？　『しゃかい』？　それはどう言う意味だい？」
「え？　えーと、えーと、おなじ考え方を持つ人とか、ちがう考えを持つ人とかが、国を作ったりしたり、住んだりとか、こう、物を交換したりとか、えっと分かんないけど何かそう言う感じのやつ！」
　彼は眉を顰めて、国造りのことか？　とか何とか言っていたが、それもよく理解できなかった。
「まあ、細かいことはいいか。『武家の出』と言うのはだね、つまり、私の家は侍の家系なのだよ。侍と言うのは分かるかい？」
「うん。刀を持ってる人だよね」
「そうだね、それで大丈夫。で、『お目通り』と言うのは、自分より地位の高い人にお会いすることを言うんだ」
「そっか、じゃあ、なおたかはしょうぐんさまって人の下の下の地位なんだね。だからオメドオリできないんだよね」
「あはは、そうだね。なかなかはっきり言うね」
　彼は侮辱とも、むしろそうとしか取れない言葉を苦笑だけで済ましてくれた。
　そこで私はあれ、と思った。すぐさま彼にぶつけてみる。
「あれ、でも、みゆ、しょうぐんさまって人知らない。そんなにゆうめいな人なら知っててもおかしくないのに」
「そうなのかい？　うーん、幼い子どもでも知っているのが普通なんだがね」
「みゆ、普通じゃないの？　そう言えば、へんなゆめを見るし。もしかしてみゆ、どこかおかしいのかな」
　そう考えるとどんどん自分はおかしいのだという風に思えてしまって、涙が込み上げてきた。彼は慌てたように私の頭を撫でながら言った。
「お、落ち着いて。君は全然奇怪などではないよ。私はあまり女性のことは分からないが、君はとても可愛らしい子だと思う」
「ほんとう？　ほんとうにそう思う？」
「うん、本当だよ。私が嘘を吐くやつに見えるかい？」
「ううん。なおたかはやさしい人に見える」
　私が涙を拭って笑顔を作ると、彼も安堵したように笑った。なんとなく、その笑顔に懐かしいものを感じて、私は首をひねった。
「……め」
「え？」
　いきなり彼が呟いた。いきなりの事に私ははっきりと聞き取れなくて、訊き返した。
「変な夢を見ると言ったね。それはどんな夢なのだい？」
「あ、えっと、その、嫌な顔をしたりしないでね」
「あい分かった」
　私は深く息を吸った。あの事を家族以外の人間に言ったのは幼馴染みの雫だけだ。少しの緊張を抑えて口を開いた。
「人が目の前でしぬゆめ」
　彼が息を呑むのが分かった。私はそれを敢えて無視した。
「目の前で、男の人――わかい人よ――が別の男の人にさされてしぬの。ちがいっぱいながれるの。それで、私もそのあとすぐにたおれて、いきがくるしくなって……そこでいつも目がさめるの。……そう言えば、その人たちもなおたかみたいにきものを着てた。たしか、さされた方はオレンジっぽい……えっと、こい黄色のきもので、さした方はしぶい緑色のきものを着ていたの」
　彼はまた目を見開いていた。けれど、先ほど名前を聞いた時とはその様相はまったく違っていた。そこには、驚愕や恐怖、そし

て後悔といった思いが浮かんでいた。
「どうしたの？　何か私いけない事言っちゃった？　それならごめんなさい」
「違う、いや違うわけではないんだけど違うよ。君の話があまりにも……」
「あまりにも？」
「いや、何でもないよ。心配をかけてしまったね」
いつもそうだ。彼もそうだ。どうして大人はいつも隠してしまおうとするのだろう。全然隠せてなんかいないのに。
「何でもなくないよ！　なおたか今つらそうだもん！　ガマンしてるもん！」
私は叫ぶように言った。彼は少し身を引きながら微笑んでいた。
「はは、そうだね。すまない。本当にすまない」
「わかったならいいわ。それで、なおたかは何を思ったの？」
子どもの好奇心は時として残酷だ。彼は話したくなさそうだったのに、私はただ知りたくて、彼に尋ねてしまった。彼は少しの逡巡の後、渋々口を開いた。
「私も似たようなことを経験したことがあってね」
「なおたかもゆめを見たの？」
「いいや、私はその夢に出てきた方の経験だよ」
「だれかをころしたの？」
「ああ。殺す気は無かったというのは、ただの言い訳にしかならないだろうね」
殺す気は無かった。それは殺人を犯した人の常套句だ。しかし、彼は本心からそうであるのだと言っているように思えた。
「じゃあ、ゆるされるよ、きっと」
「！」
「だってなおたかは、今すっごくこうかいしてるんでしょ？　今すっごくくるしんでるんでしょ？　だからきっとゆるされるよ」
彼を真っ直ぐに見据えて言う。彼は何と言うか、ハトが豆鉄砲食らったような顔とは正にこういう顔のことなんだろうなと言う顔をしていた。一瞬の間の後、彼は腹を抱えて笑い出した。
「あはははは！」
「？」
「すまない。君のようなちい、さい子にそんな事を言って、もらえるとは思っていなかったからね。うん、いや、とてもうれし、い事なのだよ。だけど、ずっと背負っていこうと覚悟していた事をあっけなく許されてしまったから、戸惑ったんだ。ありがとう」
彼は笑いすぎたらしく、はらはらと涙をこぼしていた。
私はただ言いたい事言っただけ――しかもかなり上から目線で失礼な――なので、どうにもむず痒くて、むうっと口を尖らせた。
「気を悪くさせてしまったなら謝る。すまな――」
「あやまらなくていいよ！　別に怒ってるわけじゃないし。あ、でも、なおたかがしょっちゅうあやまるのには怒ってるかも」
「私はそんなに謝っていたかな。気が付かなかった」
彼はまったく気付いていなかったようだった。
「みゆと会ってからすこししか経ってないのに、もう何度もあやまってる。そんなに謝ってたら幸せが逃げちゃうよ」
「そうなのかい？　それは損な事をしていたな。でも手遅れだ」
「何で？」
彼は悲しそうな顔で口を開いた。
「だって私は――――」

「あれ、何て言ったんだっけ、なおたかは」
そこで私は現実に戻ってきた。と言うと痛い人間に思われるだろうが、ただ昔の思い出を辿っていただけだ。

そんな事は問題ではなくて、今は、彼が何と言ったかだ。
「日記にも書いてないし、誰かに訊くわけにもいかないし……」
なおたかが何かを言って、その後の二人の会話は不思議と何も思い出せない。急に母親に怒られているシーンに飛んでいくのだ。
あれからは大変だったらしい。まず兄が両親のところに飛んでいき、そこから大捜索が始まった。雨が降って皆が諦めかけた時に、ひょっこりと戻ってきたらしい。それから怒られ泣かれ、そして家に帰るまでずっと親の傍らから離れるのを許されなかった。
「そう言えば、『みかみなおたか』ってどう書くのかな。よくよく考えてみれば、あの場面は色々とおかしな事だらけなのよね。なおたかの服装とか、あとは着物の綺麗さとか……あれ、着物からいつ、元の服に着かえたんだっけ」
やはり、早急にあの出来事の全貌を知らなければ。今思い出したが、夢を見なくなったのはあの直後なのだ。絶対に関係がないわけはないのだから。
「とりあえず書いておこう」
再びシャープペンシルを手に取り、日記に向かい直す。書く事は沢山あるし、謎も残ったというか新しく増えたし――今夜も徹夜だ。明日、友達にあったら文句を言ってやらなくては。
一瞬、一つの考えが過った。それはあまりにも荒唐無稽で、私はすぐにその考えを消し去った。ありえない。彼が――
みかみなおたかが、もう死んだ存在だなんて。